『金魚救い』

上田　翔

登場人物

清宮優斗（9）小学3年生

清宮麻美（35）優斗の母親

○道（夜）

男性たち、神輿を担いでいる。

○他の道（夜）

屋台が沿道に並ぶ。

『金魚すくい』と書かれた屋台。

プールの中を泳ぐ金魚たち。

清宮優斗（９）、ポイを使って金魚を追いかける。逃げる金魚たち。追いかけるポイ。

優斗、ポイを持ち上げる。

ぽいの真ん中には大きな穴。

優斗「あー、もう！」

金魚が１匹跳ねる。優斗が持つ器にダイブ。

優斗「え！　すごい！　勝手に入った！」

顔をくしゃくしゃにして笑う優斗。

器の中を泳ぐ金魚。サイズは３センチほど。

○別の道（夜）

ビニール袋の中を泳ぐ金魚。

優斗、両手で袋を持っている。

清宮麻美（35）、優斗の隣を歩く。

麻美「自分で世話してよ」

優斗「わかってるよ。金ちゃん今日から家族だね」

麻美「はやっ。もう名前つけたの……」

優斗、笑顔。見つめ合う金魚と優斗。

○清宮家・外観（夜）

新築の一軒家。

○同・リビング（夜）

棚の上にある金魚鉢がある。

金魚、鉢の中を泳ぎ回っている。

優斗、金魚の餌をひとつまみ。金魚鉢の中に落とす。

金魚、掃除機のように餌を吸引する。

優斗「よく食べるねー」

金魚、優斗の顔を見て口をパクパク。

優斗「まだ食べたいの？」

優斗、餌をひとつまみ鉢に落とす。

金魚、餌を全て吸い込む。

優斗、笑顔で金魚を見つめる。

○同・庭

金魚、バケツの中を泳ぐ。金魚は成長して30センチほどになっている。

優斗、金魚鉢をスポンジで擦る。

家の中から、

麻美の声「優斗ー。ちょっと来てくれる？」

優斗「わかったー」

バケツをチラッと見る。家の中に入っていく。

○道路

電線にカラスがとまっている。

○清宮家・庭

優斗、家から出てくる。
バケツの縁にカラスがとまっている。
優斗「うわっ！」
カラス、クチバシを水中に入れる。「グァー」と鳴き声を上げる。
優斗「金ちゃん！」
走る。カラスに向かって、腕を振る。
カラス、飛び去っていく。
優斗「金ちゃん！　大丈夫!?」
金魚、高速で泳いでいる。
優斗「良かったぁ……」
その場に座り込む優斗。
金魚、跳ねて無事をアピール。
優斗「ははっ」
目を潤ませて、笑顔になる優斗。
○道路
カラス、電線にとまっている。カラスのクチバシが欠けている。

○同・リビング（夕）

棚の上に金魚鉢がある。

金魚の大きさは1メートルほどになっている。

優斗、片手いっぱいに餌を握って、金魚鉢に落とす。

優斗「金ちゃん、ここじゃ狭いよね」

麻美、部屋に入ってくる。

優斗「お母さん。大きい金魚鉢買ってよ」

麻美、金魚鉢を見て、

麻美「これで十分。普通こんなに大きくならないから、金魚って。餌あげすぎなのよ」

優斗「えー、だって。金ちゃんが食べたそうだったし……」

麻美「言い訳しない。餌の量を減らしなさい。そのうち小さくなるから」

優斗「うー」

肩を落とす。

金魚、真っ黒な目玉で麻美を見る。

○同・優斗の部屋（夜）

優斗、ベットで寝ている。

○同・リビング（夜）

麻美、食器を洗っている。

黒い影が麻美に近づく。

麻美「誰っ！」

振り返る麻美。誰もいない。

麻美「気のせい……？」

金魚鉢の中の金魚。真っ黒な目玉で麻美を見つめている。

麻美、金魚に気づいて、

麻美「気持ち悪い」

金魚鉢に歩み寄る。顔を近づける。

真っ黒な目玉の金魚。

麻美「ほんっと、気持ち悪い」

金魚、高速で口をパクパクバクバク。金魚の口の動きに連動して周りの家具が揺れ動く。

麻美「ひぃ！　なに、何なの!?」

尻餅をつく麻美。
金魚、高速で口をバクバクバクバク。
麻美、口を開けて青ざめる。
立ち上がる麻美。金魚鉢を持ち上げて、
走って部屋を出る。

○同・外観（朝）

○同・リビング（朝）
麻美、料理を作っている。
優斗、部屋に入ってくる。金魚鉢の中
身が空になっている。
優斗「え？　なんで？　お母さん、金ちゃん
知らない？」
麻美、声を震わせて、
麻美「金魚ならまた買ってあげるから」
優斗「金ちゃんはどうしたの！」
麻美「大きい金魚鉢が欲しいって言ってたじ
ゃない？」
優斗「どういうこと！　わかんないよ！」

麻美「金魚は湖に逃してあげたの」

優斗「え」

麻美「優斗。金魚の気持ちを考えて。金魚鉢より、湖で泳ぐ方が幸せだと思わない？」

優斗「そんなことないっ！　ばかっ！」

部屋を飛び出す。

麻美「ちょっと待ちなさい！」

○同・外（朝）

優斗、玄関から飛び出す。走る。

○湖・全景

水面には逆さ富士が映っている。

○同・ほとり

優斗、歩いている。湖に向かって、

優斗「金ちゃーん！」

○同・別のほとり

優斗、歩いている。湖に向かって、

優斗「金ちゃーん！」

○同・さらに別のほとり（夕）

優斗、ふらふらと歩く。

優斗「金ちゃーん……」

その場に座り込む優斗。

優斗「金ちゃん、どこにいるの？　もう会えないの……」

ぴしゃん、と湖で何かが跳ねる。

優斗「金ちゃん！」

優斗、湖の方へ駆ける。優斗の足、膝、腰と、徐々に水に沈んでいく。

優斗の体が一気に湖に沈む。

優斗「わぁ！」

優斗の顔は水面を出たり、沈んだり。

優斗「た、助けて。助けて。金ちゃん……」

○同・水中（夕）

優斗、漂っている。

巨大な影が優斗に接近。

○同・水上（夕）

優斗と金魚が、跳ね出てくる。優斗、金魚の背中に乗っている。金魚は６メートルほどになっている。

優斗「金ちゃん！」

○同・ほとり（夕）

優斗、金魚の前にいる。金魚は湖の中。

優斗「ありがとう金ちゃん！」

金魚に抱きつく優斗。

優斗「お母さんが酷いことしてごめん！　でもお母さんのいう通りだ。こんなに大きくなったら、湖にいる方が良いよね」

金魚、ヒレをパタパタ。

優斗、目から涙が溢れる。

優斗「また来るからね！」

走り去る優斗。

金魚、優斗の後ろ姿を見つめている。

金魚、口をパクパク。何かを吐き出す。

地面に転がる人間の頭蓋骨。